

大切なものは、目に見えないんだよ 星の王子さま

The Little Prince

『星の王子さま』はリヨン生まれのフランス人飛行士・小説家アントワーン・ド・サン＝テグジュペリ（1900年～1944年）の小説です。1943年にアメリカで出版されました。初版以来、200を超える国と地域の言葉で翻訳されています。飛行士としての経験をもとに人間性を深く見つめた作品を残し、『星の王子さま』はその代表作として有名です。

1935年、自ら操縦する飛行機が機体トラブルでサハラ砂漠（リビア砂漠とも）に不時着した体験が本作に反映しているといわれます。物語の前置きに「大人の人」への献辞があり、友人で作家・美術評論家であるレオン・ヴェルトの「子どもだったころ」に献呈されています。ヴェルトは平和主義者のユダヤ人で、ナチス・ドイツの弾圧対象でした。

● 星の王子様

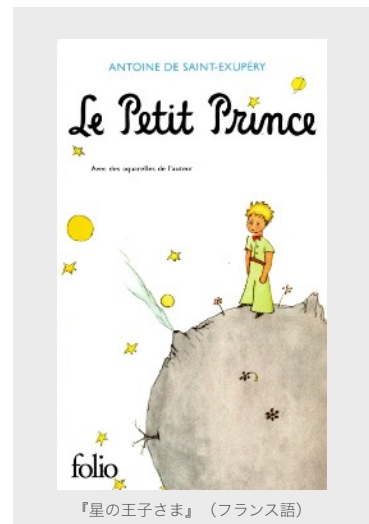
操縦士の「ぼく」はサハラ砂漠に不時着しました。誰もいない砂漠で不安な夜を過ごした「ぼく」は、翌日、1人の少年と出会います。少年は、ある小惑星からやってきた王子でした。その小惑星は家ほどの大きさながら、火山が3つもあり、いずれ根を張って大きく成長すると小惑星を破壊しかねないバオバブの芽と、他の惑星からやってきた種から成長したバラの花が咲いていました。ある日、王子はバラの花と喧嘩したことをきっかけに、他の星の世界を見に行く旅に出ます。王子は小惑星をいくつか巡り、そこで奇妙な大人たちに出会い、7番目に地球を訪れます。地球の砂漠に降り立った王子は…。そこで、王子は「大切なものは、目に見えない」という「秘密」を知ることになります。



『星の王子さま』（日本語）



『星の王子さま』（ハンガリー語）



『星の王子さま』（フランス語）



『星の王子さま』（ロシア語）



王子とサン＝テグジュペリ像
（リヨン、フランス）



『星の王子さま』（ギリシア語）

みんなも大好き マンガの中の天文学

Astronomy in “MANGA”

今や日本を代表する文化のひとつとなった「漫画（マンガ）」、現実には星の世界に行くとなると何光年も旅を続け、他の銀河には数百万～数十億光年もの広大な空間が横たわっています。しかし、フィクションの世界ではそれらを自由に飛び越えることもできます。例えば「銀河鉄道999」のように、マンガには以前からそうした天文を扱った作品が数多くあります。また、「巨人の星」のように天体のある意味での「アイコン」として登場させる作品も見受けられます。こうして、マンガを通じて天文の世界を知るようになったり、興味を持ったりする人も少なくないのではないのでしょうか。

ここでは、皆さんにもお馴染みの藤子・F・不二雄作品の『ドラえもん』と『パーマン』に出てくる天文学に関わる描写を紹介していきます。

●『ドラえもん』の中の天文学

『ドラえもん』第19巻の「クイズは地球をめぐる」では、のび太は未来のクイズマシーン「アクションクイズ」が出題するクイズに挑戦することになりました。問題は以下の4つです。

- 第1問 その場所で今すぐ海水浴をせよ。
- 第2問 時速1500キロ以上のスピードで走れ。
- 第3問 1分以内に西から東へ地球1周せよ。
- 第4問 この日光写真をやきつけよ。ただしこれは30時間連続で太陽にあてねばならない。途中で夜になるとともにもどる。

解答者はクイズの解答に失敗すると、「アクションクイズ」の機械から電撃を浴びせられるという過酷なルールがあります。第3問までのクイズの不正解し、3度の電撃を受けたのび太は、第4問の正解も分からず、「どこでもドア」で世界の果て南極に逃げて出しました。「アクションクイズ」はのび太を追いかけていきますが、その時、南極は日が沈まない夏であったため、のび太はクイズに正解することができました。地軸の傾きに気づけば良かったのですね。

みなさんもぜひ、第1問から第3問にチャレンジしてみてください。



藤子・F・不二雄『ドラえもん』第19巻、小学館、1980年、142-143頁

●『パーマン』の中の天文学

『パーマン』第7巻の最終話「バード星への道」では、パーマン1号から4号の中から、もっとも優秀なものがバードマンの星（バード星）へ留学できることとなり、審査の結果、パーマン1号みつ夫が選出されました。出発の前夜、みつ夫はコピーロボットからバード星が「ケンタウルス座プロキシマ」であるとの説明を受けながら、二人でプロキシマを見上げていました。その星が4.3光年もの距離にあることを聞いてみつ夫は怖気づいてしまいましたが、3人のパーマンたちに「りっぱなパーマンになったら帰ってくることを約束して、旅立って行くのでした。

《天文学者の視点1》

マンガの中で、コピーロボットが指差している方向は仰角が30°ほどありますが、ケンタウルス座プロキシマは南天の星なので日本からはほとんど見えません。地軸の歳差運動の影響で観測できるようになるには、『パーマン』の舞台設定は西暦17,500年頃と見積もれます。『ドラえもん』より遥かに未来の物語ということになってしまいますね。

《天文学者の視点2》

ケンタウルス座プロキシマは恒星で、パーマンといえどもそこで訓練や生活はできません。つまり、バード星はその周りを回っている惑星ということになります。最近、ケンタウルス座プロキシマには惑星（ケンタウルス座プロキシマb）が存在することが観測から明らかになりました。しかも、液体の水が存在しえるハビタブルゾーンにその惑星はあるのです。『パーマン』の頃には惑星のことなど知る由もなかったのに、予言的中でしょうか。



藤子・F・不二雄『パーマン』第7巻、小学館、2016年、182頁